

## 杜甫の中の陶淵明

釜谷武志

神戸大學

六朝期の詩人の陶淵明は、六朝においては、隱者としての側面を強調して見られていた。その詩人としての評價が定まるのは宋代に入ってからであるとされる。<sup>①</sup>では、唐代の杜甫においてはどのようなふうであったのか。杜甫の詩にあらわれる陶淵明については、すでに文學批評史の分野で論じられているが、本論ではそれらを參考にしながら、杜甫の陶淵明觀について再考してみたい。

### 一

まず「河南の韋尹丈人に寄せ奉る」詩を取りあげてみよう。二十句からなる古詩で、杜甫三十七歳の作とされる。「丈人」は老人に對する敬稱であるが、吉川幸次郎氏<sup>②</sup>

は、姻戚關係にあつた韋濟を指すとし、「おじぎみ」と解釋している。その韋濟が事あるごとに杜甫のことを氣遣つて人々に消息を聞いてくれているとのべた後、それに續く第九句から第十六句は次のとおりである。

濁酒尋陶令 濁酒 陶令を尋ね

丹砂訪葛洪 丹砂 葛洪を訪ぬ

江湖漂短褐 江湖 短褐を漂わせ

霜雪滿飛蓬 霜雪 飛蓬に滿つ

牢落乾坤大 牢落 乾坤大いに

周流道術空 周流 道術空し

謬慙知薊子 謬<sup>あやま</sup>つて薊子を知るるに慙<sup>は</sup>じ

眞怯笑揚雄 眞に揚雄を笑わんとするに怯<sup>お</sup>ず

彭澤縣の縣令を最後の官として二度と出仕しようとしなかつた陶淵明が、濁り酒と結びついて登場している。この句と對になつてゐる第十句には、丹砂と葛洪が取りあげられていて、葛洪は丹砂による仙藥の製造をその特性として描かれてゐる。淵明と酒が結びつくのは「飲酒」詩をはじめとする作品からも知られるし、『宋書』隱逸傳などに載

せられる彼の傳記資料からもうかがわれる。

葛洪は鍊丹術によって長生を求めた道教の徒であるが、廣義の隱者の範疇に入り、陶淵明も同じく隱逸の人としてとらえられているようである。續く句でも、粗末な服装で江湖をさまよい、ざんばら髪で霜や雪の中を行くと言い、隱逸の行動が描かれている。ちなみに「短褐」はめずらしい語ではないが、陶淵明の「五柳先生傳」にも「短褐穿結し、簞瓢屨しば空し」と見える。

なおこの詩で陶淵明・葛洪とともに出てくる歴史上の人物には、薊子と揚雄がいる。薊子すなわち薊子訓は後漢の人で、『後漢書』方術傳によれば、神異の道を體得していて、彼が都に至ると數百人の高官が訪問したという。揚雄は前漢末の學者文人であるが、ここは彼の「解嘲」に見える、俗人から嘲笑を受けたことを意識して言うのである。つまり、司馬相如と並んで前漢を代表する賦の作者というよりも、人々から理解されなかつた側面に着目されているのである。當該の二句は、薊子と揚雄を杜甫自身になぞらえて、杜甫が高官の韋濟に厚遇されたこと、しかし、俗人

からは嘲笑されたことをいう。

大曆二年（七六七）秋、杜甫五十六歳の時の作とされる「復愁」十二首では、其の十一で淵明に言及している。

每恨陶彭澤 毎に恨む 陶彭澤

無錢對菊花 錢無く 菊花に對す

如今九日至 如今 九日至り

自覺酒須賒 自ら酒須く賒るべきを覺る

大意は次のとおりであろう。いつも恨めしく思うのは、陶淵明が錢がなくとも菊の花に相對していたことである。今、九月九日になって、自分で酒を買わなければならないことをさとした。

『宋書』隱逸傳などに見える、陶淵明の故事をふまえている。九月九日に酒がなかつたため、家の近くで菊の花が咲いている場において、おそらくは自らを慰めようとしていたところ、江州刺史の王弘が人をやって淵明に酒を届けてきた。王弘にはもちろん淵明に近づきたいという意圖があつたわけだし、淵明にそれが分からぬはずもなかつたであろうが、その場で酒を受け取って飲んだという。

杜甫は淵明と同様に貧困をきわめていたが、淵明には人から届けてもらえる酒があつたのに對し、杜甫にはそのあつてもなく、自ら購うほかなかつたことをいう。

ここでも、淵明は酒、菊など、彼の作品に特徴的に見える語や彼の傳記と結びついて出てきている。三十代に書かれた作のみならず、ここに取りあげた杜甫晩年の作においてもそうであり、杜甫にとつて、わかいころはもちろんのこと、晩年近くになつてからも、陶淵明を酒と結びつけて理解していたといえよう。

そのことは、陶淵明が謝靈運と併稱される例においても、變わらない。「張十二山人彪に寄す三十韻」という長篇の詩を次に見よう。張彪は「山人」とあるように隱者である。かつて歴下なる山東濟南の地で杜甫は張彪と知り合い、その後關西の地で再會して、さらに別れた後に張彪へこの詩を寄せたことが、詩全體から知られる。乾元二年（七五九）、杜甫四十八歳の作とされる。冒頭の八句を引用する。

獨臥嵩陽客 獨り臥す 嵩陽の客

三違潁水春 三たび違ふ 潁水の春

艱難隨老母 艱難 老母に隨い

慘澹向時人 慘澹 時人に向かう

謝氏尋山屐 謝氏 山を尋ぬる屐

陶公漉酒巾 陶公 酒を漉す巾

群凶彌宇宙 群凶 宇宙に彌る

此物在風塵 此の物 風塵に在り

嵩山の南に世俗から離れてひとり居る張彪は、潁水近くの故郷を離れてすでに三年。戦亂の中、老いた母に仕えて孝を盡くし、痛ましい状況の下、世の人々に相對する。謝靈運が山中を歩き回るのに履いた下駄、陶淵明が濁酒を漉すのに用いた頭巾。多くの賊がこの世にはびこる中、屐や巾は俗世にある。

下駄や頭巾が俗世にあるというのは、隱遁者である張彪が俗中に出てきたことを指すのであろう。ここで陶淵明は、かぶっていた葛の頭巾を脱いでどぶろくを漉し、漉し終わるとまたそのまま頭にかぶつたという逸話（『宋書』本傳等）によって、謝靈運と並んで登場している。謝靈運と併稱されて、着目すれば、淵明は六朝を代表する詩人と

とらえられていることになるが、酒を漉した頭巾に着目すれば、むしろ隠者ととらえられていることになる。謝靈運も、その下駄を登山に用いていたことからすると、山中の隠遁者として見られているのである。

次に「石櫃閣」の後半を掲げる。この詩は、乾元二年、杜甫四十八歳の年に同谷から成都へ赴くことになり、その道中に作った十二首の連作詩の第八首にあたる。連作の他の詩と同様に、五言十六句から成る。前半では、石櫃閣なる川中の奇岩を中心とした晩冬の情景をのべている。

羈棲負幽意 羈棲 幽意に負おむき

感嘆向絶跡 感嘆 絶跡に向かう

信甘孱懦嬰 信まことに甘んず 孱せん懦だの嬰えい

不獨凍餒迫 獨り凍餒に迫らるるのみならず

優游謝康樂 優游す 謝康樂

放浪陶彭澤 放浪す 陶彭澤

吾衰未自由 吾衰えて未だ自由ならず

謝爾性所適 爾の性の適する所に謝す

旅の身ゆえ深く物思いにふけることもままならず、珍しい

杜甫の中の陶淵明（釜倉）

風景に感嘆しながら遠く離れた地をめざす。それというのも、病弱な體であるため仕方ないからであって、飢えと凍えのせいだけではない。ゆつたりと楽しんだ謝靈運、氣ままに生きた陶淵明。わたしは年老いて衰え、思うままにはいかない。君たちが本性にまかせて生きているのにはかなわない。

道中の絶景をじっくり味わう餘裕もないというから、ここでの陶淵明は謝靈運とともに、詩人としての側面もさることながら、自由氣ままに自然の風景を楽しんだ先人として見られている。

では、次の例はどうであろうか。上元二年（七六一）、杜甫五十歳の時の作とされる「江上にて水の海の如き勢に値あいて聊か短述す」で、ここでも謝靈運と對になって登場している。

爲人性僻耽佳句 人と爲り性僻にして佳句に耽る

語不驚人死不休 語 人を驚かせずんば死すとも休や

ます

老去詩篇渾漫興 老い去りて詩篇渾すべて漫興なり

春來花鳥莫深愁 春來たりて花鳥深く愁うる莫し  
新添水檻供垂釣 新たに水檻を添えて 垂釣に供し  
故著浮槎替入舟 故より浮槎を著けて 入舟に替う  
焉得思如陶謝手 焉いずくにか思い陶謝の如き手を得て  
令渠述作與同遊 渠かれをして述作せしめて與ともに同遊せ

ん

この詩は冒頭の二句からしてすでに過激である。人を驚かすような詩語を生み出すまでは、死んでも續けるという激烈な表現は、まさしく詩に命を賭した杜甫ならではないのである。『文選』をはじめとする前代の文學を深く讀みこみ、そこに見える語を自由自在に使いこなしながら、なおかつ過去に使用例を見ない新たな詩語を數多く生み出した杜甫にしてはじめて口にすることのできる表現である。

詩に對するそうした激しい野心を抱いてはいるものの、年をとつてからものする詩篇には、とりとめもなく作るどころがあつて、鋭さが影をひそめてきたという。もちろん作者の謙遜のことばではある。したがつて、本來ならば春が來て「花にも涙を濺ぎ」、「鳥にも心を驚かす」はずであ

るが、愁いを感じるようなそんな感情の動きも失せてしまつたのである。このたびの河川の増水に際して、新たに手すりを設けて釣りに興じるという頸聯を經ての結びの二句に、陶淵明が出てくる。

陶淵明や謝靈運のごとき「思い」をもつ詩人があれば、そんな詩人に詩を作らせて交遊したいとのべてこの詩を結ぶ。少なくともここでは、陶淵明は謝靈運と並んで、詩人としての側面を強調されている。この「思い」は、詩の構想力、想像力の意であらう。かりに酒や菊が詩の題材であつても、それらをもとにしていかに詩を構想していくかを問題にしている、陶淵明の詩における構想力に着目している點は注意すべきであらう。たとえば「飲酒」二十首などに垣間見ることのできる、作者の思いを念頭に置けばいいのであらう。

陶淵明が謝靈運と併稱される例はほかにもある。「夜許十一の詩を誦するを聽き愛して作る有り」という五言古詩がある。『杜詩詳注』に引く朱鶴齡の解釋では、天寶十四載（七五五）、長安での作とする。禪の居士である許某が

自作の詩を朗唱するのを聴いて、それを賛美しての作である。許某の詩をほめた内容の後半部、第十三句から後は次のとおり。

精微穿溟滓 精微 溟滓めいざいを穿ち

飛動摧霹靂 飛動 霹靂くわんを摧く

陶謝不枝梧 陶謝 枝梧せず

風騷共推激 風騷 共に推激す

紫燕自超詣 紫燕 自ら超詣ちゆうけい

翠駮誰剪剔 翠駮すいばく 誰か剪剔せんてきせん

君意人莫知 君の意 人知る莫く

人間夜寥闕 人間 夜 寥闕りようけつ

許某の詩の微妙な精緻さは、無限の世界を貫き、ダイナミックな動きは雷をも打ち砕く。そして、「陶謝 枝梧せず」と續くのであるが、「枝梧」は、抵抗する意。陶淵明や謝靈運もあらがうことがないというのは、彼らの詩の特質と合致することをいうのであろう。次句の「風騷」すなわち『詩經』『楚辭』も「推激す」とは、古典詩の淵源たるこれらの作品が強く推進するということで、最高級の

杜甫の中の陶淵明（釜合）

ほめ言葉になっている<sup>④</sup>。さらに「紫燕」「翠駮」といった語で、他からぬきんでた存在であることを強調する。最後は、しかしそんな許某の心を眞に理解する者は、杜甫以外にはいないと言つて結ぶ。

ここでの陶淵明は、先ほどの「江上にて水の……」詩と同様に、詩人としての一面に光があてられている。しかも對句を構成している部分の「風騷」を併せ考えると、『詩經』『楚辭』に次ぐものにとらえ、唐以前の詩人を代表する者の一人として陶淵明をあげていることになる。謝靈運と併稱されている場合、淵明を傑出した六朝詩人として取りあげていることもあると考えるとよいであろう。ただ、淵明の詩のどういった面がすぐれているというのか、詳しい言及はない。

次に「惜しむ可し」と題する詩を見よう。制作時期について、『杜詩詳注』はひとまず「上元二年（七六一）」においている。

花飛有底急 花飛ぶこと 底なの急なることか有る  
老去願春遲 老い去りて春の遅からんことを願う

可惜觀娛地 惜しむ可し 觀娛の地

都非少壯時 都すて少壯の時に非ず

寬心應是酒 心を寬くするは應に是れ酒なるべく

遣興莫過詩 興を遣やるは詩に過ぐるは莫し

此意陶潛解 此の意 陶潛解するも

吾生後汝期 吾が生 汝の期きに後のち

前半は、春の花が早く散るのを目にして、過ぎゆく春から過ぎゆく時間、そして自らの老いに思いを致し、時の経過を遅くしたいとのべる。後半では、心を寬がせるものとして酒を、感興をもよおすものとして詩をあげて、そうした自分の気持ちを理解できる人として淵明に説き及ぶ。最後は、その淵明とは時を同じくすることができなかったという恨みで、この詩を結ぶ。

淵明は酒を手にすることで心を伸びやかにし、詩を書くことで胸中の思いをあらわしたが、それと同じ境地に杜甫は達したのである。この時、淵明が目の前にいれば、いかに喜ばしいことか。そうした杜甫の思いが伝わってくる。さて、ここでの淵明像は、酒をたしなんだ人物であるとして

もに、胸の思いを詠じた詩人でもある。

以上をまとめてみると、杜甫が淵明のどういう側面を見ていたかの点について、杜甫の年齢による相違は見いだせないというべきであろう。基本的には、酒、隱逸という従来からの淵明像の延長線上においてとらえられている。ただ、單に酒にまつわる故事で知られる隱者ではなく、酒と隱逸と強く結びつく詩人であり、しかも謝靈運と並んで六朝期を代表する詩人であると考えられていたのである。

## 二

杜甫は魏の曹植をどのように評價していたのだろうか。六朝も終わりに近いころに著された鍾嶸『詩品』において、そしてまた唐代においても、過去の詩人で最高の評價が與えられていたのは曹植であることからして、この問題はきわめて興味深いところである。

さきに一部分を引用した「張十二山人彪に寄す三十韻」という長篇の詩では、曹植についても言及している。その第十三句から第二十句までを引いてみる。

靜者心多妙 靜者は心に妙多く

先生藝絶倫 先生 藝絶倫なり

草書何太古 草書 何ぞ太古なる

詩興不無神 詩興 神無くんばあらず

曹植休前輩 曹植は前輩を休め

張芝更後身 張芝は更に後身たり

數篇吟可老 數篇 吟じて老ゆ可く

一字買堪貧 一字 買いて貧に堪ゆ<sup>⑤</sup>

靜かに隱棲する張彪のごとき人は心に奥妙なところが多く、拔きんでた學藝をそなえている。その草書はなんと古風なことか、詩の興趣は人間わざとは思えない。詩の大家の曹植ですら先輩であることをやめ、草書の第一人者の張芝も逆に生まれ變わりとなろう。作った詩を何篇か朗誦すると感服してそのまま年をとっていき、筆を揮った草書の一文字を、買う人は大枚をはたくことになつて貧しくなるう。

この一段で曹植は、草書で知られる後漢の張芝と併せて、詩興のすばらしさを特徴とする詩人とされている。さきの陶淵明がほぼ同時期の謝靈運と併稱されていたように、曹

植が張芝と並べられるのも、後漢と三國という近接する時代に生きたことによるのであろう。しかも、この部分は張彪の詩と草書の才能をたたえるために、やや誇張しすぎた観をまぬがれない表現であつて、文字通りに受け取るわけにはいくまい。しかしながら、生きた時代が張芝と近い點は關係するものの、傑出した詩人の一人として曹植の名があげられているのは、杜甫が曹植をいかに高く評價していたかを物語っている。しかも、「詩興」なる語を持ち出して、曹植の詩の特質を一語であらわしており、見事というほかない。

ほかに曹植に言及したものとして、以下の詩がある。

まず「李義に別る」詩。『杜詩詳注』によれば、大曆二年（七六七）冬の作である。全四十六句からなる詩の第十三句から十六句に次のように見える。

先朝納諫諍 先朝 諫諍を納れ

直氣橫乾坤 直氣 乾坤に横たわる

子建文章壯 子建 文章壯にして

河間經術存 河間 經術存す

曹子建すなわち曹植は、その文學のスケールの大きさによつて、ひきあいに出されている。また、前漢の河間獻王・劉徳は前代から傳わつていた書物を精力的に収集し、禮樂を整えようとしたことで知られる。

詩題に見える「李義」は、唐の高祖の第十六子で、道王であつた李元慶の子孫にあたるために、陳王・曹植や河間獻王・劉徳といった、諸侯國の王で、文學と學問に優れた先人を引いて喩えているのである。なぜ曹植なのかという疑問にはこのように答えることが可能ではあるが、その曹植を「文章壯」つまり、壯大な文學をのこしたと評していることに留意しなければなるまい。

「韋左丞丈に贈り奉る二十二韻」にも見える。

甫昔少年日 甫は昔 少年の日

早充觀國賓 早く觀國の賓に充てらる

讀書破萬卷 書を讀めば萬卷を破り

下筆如有神 筆を下せば神有るが如し

賦料揚雄敵 賦は揚雄の敵と料られ

詩看子建親 詩は子建の親と看なざる

李邕求識面 李邕は面を識らんと求め

王翰願爲隣 王翰は隣と爲らんことを願う

自謂頗挺出 自ら謂う 頗る挺出し

立登要路津 立ちどころに要路の津に登らんと

右に引いたのは、第五句から十二句にかけてである。杜甫がこれまでの自分をふりかえつて、青年のころ「觀國の賓」たる科擧の受験者として推薦されたことをまずのべる。續いて、萬卷の書物に目を通し、詩文の創作を行えばこの世のものとは思えないほどのすばらしい出來映えであつたという。そして揚雄と並んで曹植の名が登場する。賦においては前漢の賦の作者を代表する揚雄に匹敵すると思われ、詩においては曹植の親戚と見なされるほどだといひ、すこぶる自信にあふれている。詩のみならず賦にもふれるのは、賦が漢魏六朝を通じて代表的な文學ジャンルであつたことに加えて、唐の科擧の試験科目でもあつたこと、さらにはそれに關係して杜甫自身も力を入れて「鵬の賦」などの賦を創作していることも關係しよう。

本詩はさらに、當時の文壇の大御所であつた李邕が知遇

を得たいと言つて来たこと、著名な詩人の王翰が隣に越して来たいと言つたことをいう。傑出した自らの才知を認め、ならばたちどころに政府の要人となるにちがいないと思つていたともいう。若き日の自信にあふれたさまをのべているわけであるが、ここで曹植は「筆を下せば神有るが如し」の例として、すなわちその父の曹操が誰かに代筆させたのかといふかつたのに對して、曹植自らが「筆を下せば章を成す」と答えたほど早熟であつた逸話に着目されて名があがつている。唐以前を代表する詩人としての一面をとらえていると同時に、早熟の天才であつた一面によつたのである。また揚雄については「少くして學を好み、……博覽 見ざる所無し」〔漢書〕本傳〕であつたことに着目して、「書を讀めば萬卷を破」る例として引いたのかも知れない。

次に見るのは、「故の高蜀州の人日に寄せられしに追酬す」と題し、かつて人日、すなわち一月七日に蜀州刺史の高適が杜甫に贈つた詩に、高適の死後六、七年経つたこのときになつて、和した詩である。この詩には自序が附せら

杜甫の中の陶淵明（釜谷）

れていて、大曆五年（七七〇）正月の作であることが記される。杜甫が死去する年にあたる。高適が詩を寄せてからすでに十年になるといふ。ここでは全二十四句からなる詩の最後の六句を次に引くが、直前の句までは、高適が蜀の地で寄こしてくれた詩を文箱に入れたままにしてあつたのを、たまたまこの日に見つけて、幽明境を異にする高適に思いを馳せたことをのべる。杜甫自身は瀟水や湘水の流れる南方にいて、世の亂れを正さんとするものの、思いのままにならないことにもふれている。

鼓瑟至今悲帝子

瑟を鼓して今に至るまで帝子悲し

み

曳裾何處覓王門

裾を曳いて何れの處にか王門を覓

めん

文章曹植波瀾闊

文章は曹植 波瀾闊く

服食劉安德業尊

服食は劉安 德業尊し

長笛隣家亂愁思

長笛隣家 愁思を亂し

昭州詞翰與招魂

昭州の詞翰 與に魂を招かん

瑟を鳴らして舜帝の二女は今なお帝を悲しんでおり、漢中

王李<sup>り</sup>瑋のごとき王に仕えようとしてもかなわない。李瑋の文學は、曹植のごとく大きなスケールをもち、仙薬を服して長生を求める點は、劉安のごとく尊い徳業をそなえている。隣家の笛の音が長く聞こえ、それが高適のことをいや増しに思い出させる。昭州刺史敬超<sup>けいちゆうせん</sup>先の文筆をもつてして高適の魂を呼び戻したいものだ、ということであろう。自序によれば、いま杜甫自身と心が通じ合う友人は李瑋と敬超先の二人だという。

湘水のあたりで舜帝を悲しんでいること、隣家の笛の音が愁思を亂すこと、これらはいずれも亡き高適への杜甫の思いと重なりあうが、曹植や劉安にまで言及するのはなぜか。おそらく、この二人はそれぞれ陳王であり、淮南王であり、それが漢中王の李瑋と關わるのであろう。とすれば、曹植は怒濤のごとき大きな規模の文人として見られていることは間違いないが、やはり陳王であることがその前提になつていたのである。言及されるスケールの大きさとしては、曹植の「遠遊して四海に臨み、俯仰して洪波を觀る」〔遠遊篇〕や「高樹悲風多く、海水其の波を揚ぐ」〔野田

黃雀行〕の表現を念頭においてるのである。

以上の例から見てとれるのは、杜甫が曹植をきわめて高く評價していることである。もつともそれは、『詩品』において曹植が最高位に位置づけられていることの延長線上にあつて、必ずしも杜甫の獨創ではない。では、杜甫にとつて、曹植と陶淵明はどちらが上に置かれていたのだろうか。それを考えるために、建安七子に數えられる王粲と劉楨についての言及を見よう。

伊藤正文氏<sup>⑤</sup>によると、杜甫は「王粲に言及する箇所が、十二例の多きに亘るにもかかわらず、王粲の文學に直接ふれたものは一例も見えない」という。たとえば「通泉驛南のかた通泉縣を去ること十五里の山水の作」は全十六句からなるが、最後の四句は次のとおりである。

傷時愧孔父 時を傷むこと孔父に愧じ

去國同王粲 國を去ること王粲に同じ

我生苦飄零 我が生 飄零に苦しむ

所歷有嗟嘆 歷る所 嗟嘆有り

通泉驛で山水を目にして作つた詩で、谷川のみごとな景色

は一日中見ている飽きないとして、夕暮れの川面と山の色を描寫した後、右の四句に續く。ここで王粲と對になるのは孔子である。時世を強く傷むことでは孔子にひけをとるけれども、故國を去つて流浪する點では王粲と同じだと言う。王粲は亂を避けて荊州の劉表のもとに身を寄せ、その後曹操の幕下に入るが、その經歷とともに「登樓の賦」や「七哀詩」などの故國を思う彼の作品が念頭にあつたのである。

「杜甫も、上述の如く他の盛唐詩人と同様に「登樓賦」をまず意識に上す事情もあり、その上彼自身も經過した荊州の「王粲樓」に言及したり、「去國哀王粲」(「久客」)の例が示すような、彼自身の流離の境遇を、王粲のそれに比擬して、哀歎の情を發したのが大部分である」<sup>⑦</sup>のは確かに事實であるが、やはり詩や賦の作者としての王粲を思い浮かべているのではないか。たとえ詩や賦の出來が曹植に優るとは考えていなかったにせよ。

なお、「劉楨に關しては一箇所しか見えず、それもやはり彼の病身に言及するものである」。ほかに「曹劉」と併

杜甫の中の陶淵明(釜倉)

稱するものが三箇所も見え何れも文學批評を含むが、「それは多分に對句的表現の必要上と思われる。前述の如く彼が劉楨の文學にはふれず、曹植の文學は非常に問題にしていることから見ても重點は曹にあると考えてよいと思う」<sup>⑧</sup>と言われるが、その通りであろう。

ならば、曹植が「神」「壯」「波瀾闊」といった語で評されることを考えると、曹植の作品がそなえている風格を評價しているわけで、他の建安七子はもとより、陶淵明よりも上に曹植が置かれているとすべきであろう。陶淵明は謝靈運と併稱されている場合、『詩經』『楚辭』の次に置かれている例もあるが、曹植に對する評語と比べてみれば、その位置は曹植に一步譲ると言わざるを得ない。基本的にはやはり、酒や菊にまつわる詩人として見られていたのである。

### 三

杜甫はなぜ淵明に對して、好意的な見方を詩にあらわしたのであろうか。最後にそれを考えてみよう。杜甫の「戲

れに六絶句を爲る」は、文學論がうかがえる詩としてしばしばとりあげられる。その第一首にこういう。

庾信文章老更成 庾信の文章 老いて更に成る

凌雲健筆意縱橫 凌雲の健筆 意縱橫

今人嗤點流傳賦 今人 流傳の賦を嗤點するも

不覺前賢畏後生 前賢の後生を畏るるを覺えず

庾信は梁にいたころ、その艶麗な詩風について徐陵と並んで「徐庾體」と稱されたことから、唐代では否定的にとら

えられていたと、通常概括される。しかし杜甫が彼の文學

について、晩年北周にいて更に成熟したと評するように、

杜甫にとつては模範とすべき詩人のひとりであった。もち

ろんそれは「晩年故郷に歸れないという、庾信と同じ境遇

におかれた杜甫は、庾信の文學を評する際、彼自身を庾信

に託していると思われる」ことも大きく作用してはいるの

だが。庾信に對して、雲を凌ぐほどのたくましい筆致であ

ると、具體的に稱賛していることを視野に入れると、詳し

い評語の見られなかった陶淵明に對するよりも、はるかに

高く庾信を評價していることは明らかであろう。陶淵明に

對するコメントが好意的である點をとらえて、杜甫は詩人としての陶淵明を正當に評していたというのは、やや輕率のそしりをまぬがれないであろう。少なくとも、庾信評を併せ考えれば、そういわざるをえない。

この詩で批判されているのは、その庾信の眞價に氣づかず、逆に庾信の賦をあざけている杜甫の同時代の詩人である。

杜甫は後年の庾信のみならず、初唐の四傑をも高く評價している。それは、第二首で、「楊王盧駱 當時の體」とうたい出して、最後を「廢せず江河の萬古に流るるを」と結び、江河の流れが永遠に盡きないように、楊炯・王勃・盧照隣・駱賓王の四人の作品も後世にのこるものであると言ふ點からも明らかである。ここでも、四傑と對照的に扱われているのは、杜甫の同時代人である。同時代の詩人たちの多くは、輕薄に四傑のことを嘲笑しているが、嘲笑している者たちこそが、死とともに名も失せてしまうのだと、杜甫は筆鋒鋭く批判する。

第三首でも同じく、同時代の詩人と對比して初唐の四傑

を高く評價する。その際に用いるのは、漢魏の作品のたくましさが『詩經』『楚辭』に近いのと同じようにはいかなければ、という留保をつけた評語である。漢魏の文學作品は『詩經』『楚辭』にきわめて近接しているとの見方であり、四傑はそこまではいかないが、少なくとも同時代詩人とは格段の差があると言っているのである。

第四首でも、杜甫の同時代人が庾信や四傑を嘲笑するものの、いざ自分たちが作品を作るとなると、その出来具合は美麗な詩風があるだけで、たくましさには缺けると言う。

そして第五首と最終の第六首で、全體にかかわる杜甫の文學觀が披瀝される。第五首では「今人を薄んぜず古人を愛し、清詞麗句必ず隣と爲せ」、すなわち、より近い時代の詩人も、古い時代の詩人もともにすべて重んじて、すぐれた表現があればすべて模範とすべきだと言う。

それを更に敷衍したのが第六首である。ここでは「偽體を別裁して風雅に親しみ、轉うつた益ますます師多きは是れ汝の師なり」として、眞に模範とすべき『詩經』の詩、もしくはそれに近い詩に親しみ、それゆえ必然的に多くなるが、多

杜甫の中の陶淵明（釜合）

くの前代の詩を模範にしろとのべる。同じく第六首では「たが透いに相い祖述して復た誰をか先にせん」とすら言う。

過去のすぐれた文學作品を模範として作品を創作するわけで、當然のことながら、時代が降れば降るほど、すぐれた作品は増加の一途をたどる。そうした数多くある名作を手本にするのであつて、その中で優先順位をつけて學ぶべきものを定めてかかるのではないと言う。

もちろん『詩經』は別格であつて、優先順位としては一位になる。しかしながら、それに次ぐ作品がどれかという議論をするよりは、すぐれたものをすべて自らの手本として學ぶべきだと言うのであろう。

してみると、杜甫にとって、陶淵明と曹植のどちらが優先されるべきかという問題も、そもそも意味をなさなくなる。曹植の作品には、陶淵明の作品よりも學ぶべき點が多々あるという考えは成立する。だが、陶淵明を學ぶよりは曹植を學ぶ方がよいという議論は成り立たないのである。

杜甫にとって最も忌むべき態度は、同時代の詩人たちのように、庾信や初唐の四傑を嘲笑う傲慢さである。杜甫の

詩はどれをとってみても誠實さが滲み出ていて、それが讀者の心を深く打つのであるが、文學觀においてもこれと同様であることが確認される。杜甫は陶淵明を高く評價していると言つて間違いない。が、より正確には、杜甫は陶淵明を「も」、高く評價していると言ふべきであろう。

註

- ① 拙著『陶淵明』(岩波書店、二〇一二年) 第一部を参照。  
 ② たとえば、伊藤正文「盛唐詩人と前代の詩人」(『中國文學報』第八冊・一〇冊、一九五八年・五九年。のち『建安詩人とその傳統』、創文社、二〇〇二年)。王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』(上海古籍出版社、一九九四年) 第二編第二章第四節杜甫。  
 ③ 吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊(筑摩書房、一九七九年) 六四ページ。なお、杜詩の引用は『杜詩詳注』(中華書局、一九七九年) に據った。  
 ④ 唐代にあつて、『楚辭』が必ずしも高く評價されていたとは限らない點について、たとえば王運熙・楊明『隋唐五代文學批評史』(注②所掲、二八三ページ)に「南朝から初唐にかけて長期にわたつて流行していた軟弱な文風を改めようとして、初唐盛唐の文人には、齊・梁・陳・隋・初唐の文風を

猛烈に攻撃した上、こうした軟弱で華麗な文風は楚辭・漢賦に源を發するとして一緒に非難する者がいた。……(王勃・賈至・李白らは) いずれも楚辭や漢賦を低く評した。杜甫は屈原・宋玉や揚雄・司馬相如をきわめて高く評價して認めたが、この點において王勃・賈至・李白らとは異なる態度であつた」と言う。

- ⑤ 『杜詩詳注』に「賈」字を「舊<sup>も</sup>と買<sup>も</sup>に作る」と言うのに從つた。  
 ⑥ 伊藤正文「盛唐詩人と前代の詩人」(『建安詩人とその傳統』、四九一ページ)。  
 ⑦ 注⑥に同じ。  
 ⑧ 注⑥所掲書、四八八ページ。  
 ⑨ 庾信評價については注④所掲書、二八五ページに「唐初の文人には、庾信の辭賦を激しく非難する者がいた(『周書』王褒庾信傳論、『北史』文苑傳)。こうした批評は唐代中期まで踏襲されたが、杜甫は「今人 流傳の賦を嗤點する」現象に賛成できず、庾信晩年の詩賦の老成したたくましさを取りわけ重視した」という。  
 ⑩ 京都大學中國文學研究室編『唐代の文論』、研文出版、二〇〇八年、二四五ページ。